
ポスティーノ

宮蒔 土靖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポストイーノ

【Nコード】

N4868Y

【作者名】

宮蒔 士靖

【あらすじ】

水の都・ベネディール。小舟を車代わりに人々は明るく陽気に暮らしている。そんな街を気に入り、一人越してきた売れない絵描きと、陽気な街とは反対に無口で無愛想な郵便配達員との交流の物語。現代の架空の街を舞台に、ゆっくりゆっくり互いを知っていく男女の物語です。

一日の始まり

朝の七時。東の空から顔をだした太陽のあたたかな光りをうけ、赤や黄色に塗られた外壁や、街の真ん中に流れるアルモ川がその水面をきらきらと輝かせている。

ここベネディレの街はアルモ川を中心に、そこからいくつにも枝分かれした小さな運河が張り巡らされた水の都である。バルケッタとよばれる小舟を列車や車代わりに利用して、人々は毎日を過ごしている。水の都なだけあって昔からこの街は、水は神様からの贈り物、命をあたえてくれるもの、として水を大切にしてくている。

気候は一年を通して温暖で、六月の終わりぐらいから気温が上昇し夏がはじまる。

建物はテラコッタに白を混ぜたような暖色系の色を中心としたものが多く、四角くそれでいて窓周りや外構にはアーチ状の曲線が用いられた造りのものが多い。

全体としても古く歴史を感じさせる趣のある街であり、観光地としてもよく人々が訪れる街であった。

「今日もいい天気だ。絶好の絵描き日和だな」

街を東西南北に分けた一つ、東に位置するエスト地区の小さな運河に面した住宅地の一角に、一人の男が立っていた。ここはベネディレの街のなかでも特に住宅が多く密集した静かな場所で、それは文字どおり細長いブロックの様な家と家が密着したものである。

その中のひとつは最近まで空き家であった。けれど数日前からそこに一人の男が越してきたのである。男の名前はセレーノ・コルデイアーレといって、売れない絵描きであった。

「リエツラ、セレーノ。今日も絵を描きに行くの?」

隣家の二階の窓からふくよかな初老の女性が笑顔でセレーノに話しかけた。

「リエツラ、アローネ。まだ荷物が片付いていないんだ。昼までには片付けて、それから絵を描きに出かけるつもりだよ」

「そう。それは忙しい日になりそうね。朝ご飯はもう食べたの? まだなら一緒にどうかしら」

いいね、と笑顔でセレーノは答えたが、でも、と少し申し訳なさそうに頬を掻いた。

「朝食は毎日このベンチでとるって決めたんだ。ここからの眺めが好きなもんでね」

その応えにアローネはクスリと笑い、それはよかった、と言った。

「この街を気に入ってくれたみたいで嬉しいわ。ただ外で食べるのはけっこうですけど、その伸びたヒゲを剃ってからの方がいいわよ、セレーノ。みっともないわ」

セレーノは照れたように顎をさすり、慌てて洗面台に向かっていった。

ヒゲを剃ってさっぱりしたセレーノは、トマトとモツツアレラにハムとレタスをはさんで簡単につくったパニーニと、炭酸水のはいたボトルを持ってベンチに腰を降ろした。

このベンチはセレーノの家の前にだけ設置されていて、この地に

長く住んでいるアローネでさえ何故そこにだけあるのか分からないという。

けれどセレーノにとってベンチがあることはとても都合の良いことだった。なぜなら、ここからなら毎朝目の前に広がる運河をバルケッタにのって仕事に向かう人々を観察することができるし、通りを歩く人なんか「リエツラ」と陽気にセレーノに挨拶をしてくれるからだ。

そもそもセレーノがこの街に住むと決めた理由は、この街の人々の陽気さや船を利用して生活しているという、ちよつと変わった部分に魅力を感じたからである。

手を振る人たちに笑顔で振り返していると、「リエツラ」とこの街ではめずらしく物静かな声で挨拶をされた。声のする方へ振り向けば、そこには自転車の籠いっぱいに手紙をつめた郵便配達員が立っていた。

「めずらしいな。この街には女性の郵便屋さんがいるんだね」

笑顔で目の前の女性に話しかけたのだが、相手は無表情のままセレーノの言葉を無視して、手に持っていた手紙をつきだした。

「セレーノ・コルディアーレさんですね。あなたに手紙が届いています」

「え！俺にかい！？もしかしてメーラからかい」

慌てて手紙を受け取り宛名を確認すると、セレーノはがっくりと肩を落とした。

「なんだ。お袋からか……」

そんな様子を横目に、郵便配達員は自転車に跨がりその場を立ち

去ろうとしたのだが、それをセレーノが呼び止める。

「待ってくれよ。どうだい、少し話してもしないか？」

郵便配達員は怪しむような目でセレーノを見ると、抑揚のない声で言った。

「あなたにはわたしが暇人に見えるのですか？あいにくわたしは多忙ですので、これで失礼します」

「ああ、ごめん。そんな風には思っていないよ。ただちよつとめずらしいなと思ったただだよ。この街には君みたいな女性の郵便屋さんが多いのかい？」

そう言いながら少し移動して、彼女が座れるようにベンチを空けた。仕方がないな、としぶしぶ郵便配達員はそこに腰を降ろし、セレーノの質問に答える。

「いいえ。女性の職員はごくわずかで、ほとんどが男性ですよ」

「へえ。じゃあ、数少ない女性職員に会えた俺は運が良いってことだね。ところで、仕事をするにはまだちよつと時間が早いんじゃないかい？それともこの街の郵便屋さんはみんな早起きで仕事熱心なのかな」

「いいえ、と彼女は首を振る。

「仕事熱心なのはこの街の人みんなですし、早起きかどうかはその人の職によります。わたしの時間が早いのは、たんにわたしが勝手に早く仕事を始めているだけです」

「じゃあ、君が仕事熱心なんだね」

笑顔で愛想よく言ったのだが、郵便配達員はあいかわらずニコリともしない。

「たしかにわたしはこの仕事が嫌いではありませんが、このエスト地区を担当する職員がわたしを含めて二人だけです。そのくせこの地区は密集した住宅街ですから、届ける手紙も多いので、わたしは自主的に早く仕事を始めているのです」

そう言つて席を立つと、本当にこれで失礼します、と言つて籠いっぱいに入つた手紙を配達するべく、自転車に跨がつた。けれど彼女はすぐには動かず、ふと思い出したようにセレーノに尋ねた。

「ところで、コルディアーレさんは誰からかの手紙を待っているのですか？」

「ああ、恋人からのさ。この前引越したことを報せたんだけど、返事はこないみたいだ。まあ、今までだって一度も返事がきたことはないんだけどね」

そう照れたように頬を掻くセレーノにそうですかとお辞儀をして、郵便配達員はペダルを踏み込んだ。

「君、ここら辺の担当なんだろう？これからよろしくな！」

後ろ姿にそう呼びかけて、セレーノの新しい一日が始つた。

「日の始まり（後書き）」

「リエッラ」とは、「ハロー」のような軽い挨拶です。

無愛想なポステイーノ

十二時を過ぎた頃、ようやく荷物をすべて片付け終わったセレーノは、キャンバスや絵の具などの必要な道具一式を持って、家から歩いて三十分もかからないバールへと昼食をすませに足をのばした。

「リエツラ、セレーノ。今日もお絵描きかい」

「リエツラ、ヴェント。そうだよ、ここで昼食をとってからね。君のおすすめのパニーニをたのむよ」

ヴェントはここ「グストーゾ」の主人で、よく日に焼けた肌に立派な口髭、二の腕は太くとても逞しい体つきの壮年の男である。ただ少し強面なため、セレーノが初めてここを訪れた時どう声をかけていいものかしばし迷ったりもしたが、そんな見た目とは裏腹に本人はとても気さくな男である。

「どうだい、もうこの街には馴れたかい？」

「ああ、おかげさまでね。この街の人たちはみんな陽気で親切な人たちばかりだから、とても居心地がいいよ」

「そりゃあ、ここに住む奴らはみんなのんきな奴が多いだけさ。治安もいいし、観光地だからそれなり金廻りもいい。街としての心配事がないから、住人は自然と陽気にのんきに暮らすのさ。ほらできたぞ」

差し出されたパニーニを受け取りながらセレーノはふと今朝のことを思い出した。

「でもそうじゃない人もいるみたいだね。今朝女性の郵便屋さんに会ったんだけど、彼女はなんていうか、元気がない、というか無表情だったな」

それを聞いて誰のことかすぐピンときたのか、ヴェントはやれやれといったように首を振った。

「そいつはティコのことだろう。こちらのポスティーノっていったらアイツしかいないからな。ティコ・キアーロって言うんだが、飽きれちまうぐらいに愛想のない女でここらじゃ有名だ。前に観光客に道を尋ねられたときに、ちょっとは笑えばいいものを仏頂面でそっけなく答えるもんだから、相手もビビッちまってな。それを見かけた上司に注意されていたよ」

ヴェントは飽きたように続ける。

「あいつは昔からそうだな。俺もこの街に長いこと住んでるが、あいつの笑った顔なんて未だに見たことがないよ」

「それはある意味すごいことだな。けど、笑えば可愛いと思うんだけどな」

「おいおい、セレーノ。お前もしかしてティコに惚れちまったのか？ やめとけやめとけ、あんな女抱いたってつまらねえぞ」

予想もしていなかったヴェントの言葉に最後の一口だったパニーニをのどに詰まらせ、セレーノは慌ててコップいっぱいの水をいききに飲んだ。

「そういう意味じゃないさ。誰だって笑った顔の方が良いだろう？それに、あいにく俺にはちゃんと恋人がいるんだ」

今度はヴェントが驚く番だった。セレーノの言葉に興味津々にカウンターから身を乗り出し、詳しく教えると迫ってきた。

「お前もちゃっかりしてるじゃねえか。それで、相手はこの女だよ。美人さんか？写真とか持ってないのかよ」

「持つてるさ。いつも財布にいれてるからね。けど、あいにく見せるつもりはないよ。だって」

セレーノは席を立ち、カウンターに金を置いた。

「見せたら、ぜったい惚れちまうからな」

そういつて片目をつむってみせると、「ごちそうさま、と言って店をあとにした。

橋の上の騒動

ヴェントの店から一番近い船着き場からバルケッタに乗り、セレーノはアルモ川との合流地点にあるこの街一番の船着き場に向かった。

そこは東西南北に張り巡らされた小運河がもつとも多く集まる所で、市場やその他の店も多く集まり、観光客や商人などで賑わう場所であった。ここらはほぼ街の中心地区であり、チェントロと呼ばれた。

バルケッタから降りると、セレーノは船着き場の隅の方に陣取り、絵の具を広げてそこで働く人々をキャンバスに写していった。

セレーノは人が好きだった。彼が描く絵のほとんどが人を中心に描かれたものであり、風景画はあまり描かなかった。

「リエツラ、メント。今日もいい天気だね」

ときどきそこで働いている人たちに話しかけながら、セレーノは日が暮れるまで夢中で絵を描きつづけた。

辺りが薄暗くなってきた頃、セレーノは家に帰るためにバルケッタに乗っていた。

「あれは……」

ふと目線に向けた目の前に架かる橋の上で、今まさにそこから飛び降りようとしている男性と、それを止めようと必死に掴み掛かっている女性の姿が見えた。よく見るとその女性は今朝出会った郵便配達員の女性である。

「放せ、放してくれ！これは自殺行為なんかじゃねえんだ。神を冒した奴らへの抗議なんだ！俺は死なねえ。あいつらが間違っていましたと頭を下げるまで、俺はぜったいに死なねえよ！」

「たとえ死なくても危険な行為です！それにこんなことをしても状況は変わりません。とにかく一度頭を冷やしてください！」

その様子を見ていた船頭が驚いた声で言った。

「あれはチエレスティアーレ大聖堂のサントじゃないか！」

「知り合いかい？」

「ああ。もしかしてあいつ酒ひっかけてるな。ふだんは大人しい男なんだが、酒を飲んじまうとどうにも手がつけられなくなるんだよ」

そうこう言っているうちに橋の上のサントはどんどん熱くなっていく。

「よっく見ておけ、馬鹿野郎共！俺は抗議する。大聖堂を潰そうなんて、女神様を殺そうなんて、そんなことは馬鹿のすることだ！」

そう叫ぶと止める彼女を振り切って、サントは橋の上から身を投げた。と同時に、彼にしがみついていた彼女も引っ張られるように橋から落ちてしまった。

「危ない！」

そう叫んだ頃にはもう遅く、セレーノたちの目の前に鈍い音をたてながら大きな水しぶきをつくって、二人は暗く冷たい水の中へと消えていった。

「おい、大丈夫か！？どこだ、どこにいるんだ！」

なかなか浮いてこない二人をセレーノたちは必死になって探した。だいぶチェントロから離れた人通りの少ない場所とはいえ、その騒ぎを聞きつけた人々がどこからともなく現れてその場が騒然となる。

「まったく浮いてくる気配がない……。潜って探してくるよ」

セレーノはそう言って上着を脱いだ。

「待ちなよ、セレーノ。辺りもだいぶ暗くなってきた。これじゃ水に入ってたって、暗くて中が見えないよ。警察がくるのを待ったほうがいい」

「そんなことを言って、二人にもしものことがあったらどうするんだ。警察なんて待ってられないよ！」

船頭の止める声を見捨てて飛び込もうとしたその時、二人のバルケッタから少し離れたところでサントを抱えた郵便配達員、ティコ・キアーロが水面から顔を出した。

「大丈夫か！こつちだ。今助けるからな」

セレーノたちは急いでバルケッタを側までよせると、ズブぬれで通常よりも重くなった二人を船へと引き上げる。

「サントさんは気を失っています！」

そう叫ぶとティコは仰向けに横たわるサントの口元に耳をあて呼吸を確認する。次に顎を上にあげて鼻をつまみ、自分の口をサントのそれに重ねて息を吹き込んだ。それから素早く心臓マツサージにうつる。

その行為を何度か続けていると、気を失っていたサントが口から水を吐き出し、低く力のない声で唸って目を開けた。

そうしている間にもバルケッタは陸まで漕がれて、目を覚ましたサントはその場に急いでやってきた仲間と思われる男たちに引き渡された。自然とその周りには黒山の人垣ができる。

「おい。大丈夫か、サント！」

「お前つて奴は、自分から飛び込んでおいて気を失うなんて、どれだけ間抜けなんだよ」

まったくだ、とサントを囲みながら、みんな安堵した表情を浮かべてその場は和やかな雰囲気包まれる。

「悪い、みんな。心配かけたよ。でもおかげで酔いは覚めたみたいだ」

咳き込みながらも謝るサントの言葉を聞いて、その場はどっと笑い声であふれた。

「そりゃあ、良かった！お前は飲むと手に負えないからな」

そんなサントの無事な姿を見て、セレーノはほっと息を吐く。

「よかった、無事で。それもこれも彼女のおかげだ……あれ？」

当然サントの命の恩人である郵便配達員の彼女も人の輪の中にいると思って探したのだが、まったく見当たらない。

不思議に思っただが、セレーノは辺りを見回したのだが、すると少し離れた酒場の横で黙ってこちらに背をむけてその場をあとにする彼女の姿が見えた。

水を吸って重くなったであろう制帽を被り直して、酒場に止めていた自転車に跨がり、彼女は何も言わずに去って行く。

その後ろ姿は、サントが助かって明るく和やかな雰囲気の人々とは反対に、どこか寂しいものに見えた。

「おい！ちよっと待ってくれよ」

呼び止めようとするセレーノ。しかしその声は彼女に届かなかったのか、華奢なズブ濡れの背中はどうも小さくなり、あつという間に薄暗い闇の中に紛れて見えなくなってしまった。

その後ろ姿を黙って見ていると、船頭が家の前まで送りますよと声をかけてきた。

「ありがとう。頼むよ、メント」

セレーノは船頭に礼を言って、再びバルケッタに乗り込だ。

それを確認すると船頭は、誰が命の恩人なのかをサントに告げてゆつくりと船を漕ぎはじめた。

（明日も彼女に会えるかな……）

彼女ともっと話しをしてみたい。

セレーノは彼女が姿を消した方角をじっと見つめていた。

大聖堂

その夜、セレーノはなかなか眠りにつくことができず、結局一睡もしていなかった。そのかわり毎日欠かさず書いている手紙を書き、完成間近だった絵を仕上げて夜を過ごしていた。

朝は眠い目をこすりながら冷水で顔を洗いヒゲを剃り、軽い朝食をつくっていつものように家の前のベンチで道行く人々に手を振りながら食事をした。

もしかしたら今朝もあの郵便配達員が通るのではないかという思いから、朝食を食べ終わってもしばらくベンチに腰掛けていたのだが、来る気配がないことを知ると、数点の完成したキャンバスと無地の色紙と画材を持って出かけることにした。

今日はチェントロにあるチェレスティアーレ広場で絵を売りながら観光客の似顔絵を描くちょっとした商売をしに向かったのだが、その途中で乗っていたバルケッタを一度船着き場に止めてもらい、昨夜書いた手紙をポストに投函していった。

広場は相変わらず観光客で賑わっており、セレーノは三人の女神像が優雅に踊る噴水の前に店を広げたることにした。

ここチェレスティアーレ広場は、この街で一番古い聖堂であるチェレスティアーレ大聖堂が建つ場所であり、その前に立つ三美神の像が美しい噴水や、聖堂を囲むように左右に建てられた旧市街の建物があり、歴史を肌で感じる事ができるこの街の観光名所の一つである。

セレーノは折りたたみ式の簡易な椅子に腰掛け、ふと夕べのことを思い出した。

（そういえば、あの橋から飛び降りた人はこの大聖堂の人だって言ってたな……）

たしか大聖堂が云々叫んでいた。なにぶん酔って呂律の廻らない舌で叫んでいたものだから、セレーノにはよく理解できなかった。いったい彼は何を叫んでいたのだろうか……。

そんなことを考えていると、さっそく年配の老夫婦が旅の記念に似顔絵を描いてくれないかと言ってきたので、セレーノの思考はそこで中断した。

太陽が空高く位置する正午。セレーノはグストーゾでヴェントにつくってもらったパニーニを食べながら、ちよつとした昼休憩をとっていた。

午前中は老夫婦や家族連れなんかが似顔絵を求めにやってきたり、冷やかし半分に覗きにきた客なんかと楽しく話をしながら過ごしていた。

そんななか興味深い話を聞いた。正確には一人旅でこの街に訪れたという二十代半ばぐらいの青年がセレーノに尋ねてきたことなのだが、彼の話しによると近々このチェレスティアーレ大聖堂は改修工事がなされるというのだ。

本当かと尋ねれば、大聖堂の司祭とその知り合いらしき男がその件についてもめているところを見たという。

それを聞いてセレーノは一人納得した。タベ男が騒いでいたのはきつとこのことについてだろう。

たしかにこの聖堂はとても古く、今から二百年前に完成したものだという。しかも完成するまでに五百年はかかっているらしい。

この聖堂には当時の有名な彫刻家たちが施した彫像などもある。故にとっても貴重な建造物であり、そして長い年月のためにところどころにガタがきている。改修工事をせざるをえない状況だとしても、それはやむをえないことだろう。

（聖堂の関係者ならそのことの重大さぐらいわかるだろうに……。なぜあの男はあんなことをしたのだろう？）

セレーノが再び思考の海のなかに潜ろうとしていた時、視界の隅で見覚えのあるボトルグリーンの制服が見えた。それは今朝セレーノが待っていた郵便配達員のティコ・キアーロであった。

「おーい！ 郵便屋さん。一緒にごはんでも食べないかい？」

会えたことが嬉しくておもわず大声で手を振ると、それに気がついたティコは恥ずかしそうに慌てて駆け寄ってきた。

「何なんですか、あなた！ 恥ずかしいからそういうことはやめてください」

相変わらずの無表情に少しだけ怒りの表情を覗かせて、ティコはセレーノに注意した。

「ごめん。君に会いたかったものだからつい、ね。ティコも昼休み中かい？」

セレーノの言葉にティコは一瞬目を見開いた。

それからセレーノが商品の絵を置くために使っていた予備の椅子をすすめてきたので、迷いながらもそれに腰掛けた。

「そんなところです。それより、コルディアーレさんはピットオーレだったんですね」

セレーノの周りに置かれた絵を見ながらティコが言う。

「ピットオーレ？ああ、絵描きのことか。そうだよ。まあ、売れない画家だけだね」

それから、とセレーノが続ける。

「セレーノだ。俺の名前はセレーノ・コルディアーレ。コルディアーレさん、じゃなくて、セレーノって呼んでくれよ」

その言葉にティコは少し俯いて、セレーノの顔を見ずに尋ねた。

「……セレーノさんはなぜわたしの名前を知っているんですか？」
「ヴェントから聞いたんだ。知ってるかい、グストーゾって店の主人なんだけど」

知っています、と頷くティコ。
すると唐突に、ありがとうございました、と彼女は礼を言ってきた。

「夕べは橋から落ちたところを助けていただき、感謝しています」
「それは違うよ。俺は君に感謝されるようなことは何もしていないさ。むしろ感謝されるべきは君の方だろう？あんなこと、なかなかできるもんじゃない」

「わたしは当然のことをしたまです。わたしじゃなくても、あの場にいれば誰だって同じことをしたでしょう」
「いや。やっぱり君はすごいよ」

けっして自慢したりすることのないその態度に、セレーノはただただ感心していた。それからふと思いついた、気になっていた例の件についてティコに訊いてみることにした。

「そういえばさっき聞いた話しなんだけど、このチエレスティアーレ大聖堂が近々改修工事がされるんだってね。もしかして、タベの彼はそのことについて抗議していたのかい？」

「ええ、そうです」

ティコは後ろに聳え建つ厳かな雰囲気をもったチエレスティアーレ大聖堂を見上げて静かに言った。

「この大聖堂は古く歴史のある建造物です。歴史ある故に最近ではいたるところにヒビが入り、改修工事をするようになりました」

「でもそれって、やむをえないことだろう？なぜ彼は怒ってあんな無茶なことをしたんだろう」

「お酒を飲まれていたので多少大袈裟なことを言われていましたけど、一番は主祭壇に飾られた女神像にあるんです」

「どうことだと尋ねると、ティコはセレーノを振り返り淡々と事のあらましを話しました。

絵描きの失態

「一番被害が甚大なのは主祭壇の周りでした。それで改修工事をするために女神像は一度別の場所に保管されることになったのですが、その周りを確認していた時、女神像の背面にも大きく深い傷があるのが見つかったんです」

ティコはふつと溜め息を吐いた。

「それだけならばまだ直しようがあつたのですが、先月あつた地震の影響で女神様の傷が深くなり、首が今にも落ちてしまいそうなまになつてしまいました」

「そんなに大きな地震だったのかい？」

いいえ、とティコは首を振る。

「幸いさほど大きな揺れではありませんでした。けれど、あれだけの揺れであも悲惨な姿になってしまったのは、それだけ女神像も古く脆くなっていたということなんだと思います」

そう話すティコの顔にはわずかながら悲しみの色が伺えた。

「女神像もそうですが、建物のいたるところで被害が拡大していて、早急な改修工事が求められるようになったのです。けれど女神様の像だけは取り壊して新しく作り直すことが決まったんです」

え、とセレーノは驚きの声をあげた。

「修理するんじゃない？駄目なのかい？女神像だって歴史的価値のある彫

像品の一つなんだろう」

「それだけ傷が大きいということです。それを綺麗に直せる人がこの国にはいませんし、本当なら腕のいい修復家を国外から呼べればいいのですが、その他の部分を直すだけでも相当な金額になります。それならば国外から人を呼ばず、国内にいる腕のいい彫刻家たちにできるだけ当時の姿に似せた女神像を新しくつくってもらう方が、金銭的にも得なんですよ」

そのために女神像を一度取り壊し、新しい女神像をつくる。でもそれは同じ姿をした女神像ではあっても、けして長い間この街で人々を見守ってきた女神像ではないのである。

「どんなに同じ姿をしていようと、一度壊してしまったものは二度とは戻らないんです。それはもう、まったくの別の代物なんです。サントさんはそのことを強く主張していました。なんとか国外から腕の立つ修復家を呼べないか、とも言っていました。サントさんにとって大聖堂だけでなく、女神様の像もとても大切な代物なんです」

セレーノはティコの真剣な眼差しを見て、彼女にとってもその像がとても大切な代物なんだということを感じた。

それでも彼女はまったく表情を変えずに淡々とした口調で話し続けていたので、セレーノはついおかしなことを言ってしまった。

「パニーニ、て言ってごらん？」

「はい？」

予想もしていなかった言葉に、ティコは思わず目を丸くして聞き返す。

「だから、パニーニだよ。知ってるだろ？ほらこう、口角をキュッと上げて、パニーニ、と言ってごらんよ」

「わたしは真剣な話しをしているんですよ？しかもそちらから訊いてきたことなのに。それをパニーニだなんて、馬鹿にしているんですか？」

その顔にわずかに怒りの表情をにじませて、ティコは勢いよく席を立った。

「いや、違うよ。誤解だ。なんていうか、君の笑った顔を見たことがないなと思つて。それでつい、ね。気を悪くしたなら謝るよ」

「今わたしが何の話しをしていたか、あなたは聞いていましたか？聞いていたなら分かるでしょう、笑える話しなんかこれっぽっちもしていないということが！」

「悪かったよ。ことの重大さは理解できた。君もその女神像のことを大切に想っているということもね。なら、もっと悲しい顔をしたらどうだい？どうしてそんなに表情を、感情を隠そうとするんだよ」

その言葉にティコは一瞬傷ついたような表情を見せた。けれどすぐにいつもの無表情に戻すと、じつとセレーノを見下ろした。被った制帽の影でよくは見えなかったが、その瞳はどんな深い海の底よりも暗く、冷たいものに見えた。

「たしかグストーゾの主人からわたしの名前を聞いたと言っていたね。その時わたしのことを、無愛想で面白みもなくて、つまらない女だ、て言われたんじゃないですか？」

「そこまでは言われてないよ」

「そこまで、ですか。別に気になんてしていませんから、気遣いは無用です。それにもうけっこうです。あなたにこんな話しをしたわたしが間違っていました。仕事に戻るのだから失礼します。さよ

「うなら、コルディアーレさん」

最後まで感情を抑えた喋りで彼女はセレーノの背中を向けると、止める声を見捨てさつたとその場を去ってしまった。

「ちょっと待ってくれよ！ 俺が悪かった。話を聞いてくれよ」

こんなはずじゃなかったのに……。

彼女の後ろ姿を見つめながら、セレーノは乱暴に髪をかきあげた。

後悔

あれから三日がたった。毎朝外で待っていててもティコ・キアーロがセレーノの家の前を通ることはなかった。

この三日間、セレーノはずっと後悔していた。自分は彼女にとって触れてほしくないことに触れてしまったようだ。

だいたいからして、彼女は真剣にこの街にとっても、彼女にとっても大切な物について話をしてくれたのだ。それなのに自分はそのことについてまったく真剣に答えてあげられなかった。

（どうしたら彼女に会えるだろう……）

せめてきちんと謝りたい。でも郵便局に行っても彼女は仕事で外出中だという。ならばエスト地区の担当なのだからと、半ば自棄になって近所をぶらぶら歩いてみたりもしたのだけれど、けっきょく会うことはできなかった。

「ヴェント、俺はいつたいどうしたらいい？ どうしたら彼女に会って謝ることができるんだろう」

夜。セレーノはグストーゾで一人寂しく酒を飲んでいた。

「おいおい、セレーノ。元気をだせって」

セレーノから話を聞いたヴェントは、やれやれと溜め息を吐いた。

「そんなに気にすることじゃねえだろ。事実、お前が言ったことは本当のことなんだから。あのポステイーノだって、お前にズバリ言

われて少しは自分の性格を改めようって気になるんじゃないか？」

「そんな言い方はないだろう、ヴェント。誰にだって人に言われたくないことぐらいあるさ。それに」

「女神像のことか？」

ヴェントは吸っていたタバコを灰皿におしつけ、ふっと短く息を吐いた。

「その件については俺も人づてに話しは聞いていたよ。けどよ、セレーノ。これはもう決まっちゃった話しだぜ。誰にもどうにもできねえんだ。ましてやちょっと前にこの街にきたお前に何ができるって言うんだ？」

こんどはセレーノが深くため息を吐いた。

たしかにそうだ。セレーノだって、この街のことをまだよく知らない新参者がどうこう言える話ではないことぐらい、よくわかっているつもりだ。

（でも、もつと彼女に気の利いたことが言えたのではないか？）

そう思うとセレーノは居ても立ってもいらなくなるのだ。

「マジで元気だせよ。お前、本当にアイツに惚れちゃったんじゃないのか？ そんなだとお前の彼女もちまうぜ」

「冗談はよしてくれよ……。頼むからかわないでくれ」

そう訴えるとセレーノはカウンターに力なく突っ伏して、今日何度目かの溜め息を吐いた。

そのとき、

「リエツラ、セレーノにヴェント」

セレーノの隣人、アローネが陽気な声で店に入ってきた。

彼女を見たヴェントは救いの女神だとばかりに彼女に助けを求めた。

「ちょうどいいところに來たぜ、アローネ。コイツをどうにかしてティコに会わせてやってくれよ」

カウンターに突っ伏しているセレーノを見て、アローネは心配そうに声をかける。

「あらあらあら。めずらしいじゃない、セレーノが元気ないだなんて。どうかしたの？」

「話せば長くなるんだが、とにかくティコの居場所を知らないかい？」

弱々しい笑顔を見せるだけで、まったく理由を話そうとしないセレーノに代わってヴェントがアローネに言う。

すると、なんだそんなことが、とばかりにアローネは彼女の居場所をあつさり教えてくれた。

「ティコ？彼女ならこの時間だとチェレスティアール大聖堂にいるはずよ」

その言葉にセレーノはガバリと起き上がり、まるでクリスマスにとっておきのプレゼントでももらった子供みたいに、その顔をキラキラと輝かせた。

「それは本当かい、アローネ！」

「ええ。あの子、毎日この時間には必ずお祈りをしているはずだから、きっとそこにいるはずよ」

「ありがとう、アローネ！大好きだ」

ぎゅっとアローネを抱きしめて、セレーノは勢い良く店を飛び出していった。

その後ろ姿を見送りながら、アローネはポツと頬を赤く染めた。

「若い男に抱きしめられるなんて、何年ぶりかしら」

デートのお誘い

バルケッタに飛び乗ったセレーノは、できるだけ急いでくれと船頭に言つて、チエレスティアーレ大聖堂へと向かつて行つた。

バルケッタが船着き場に着くと、船頭に短く礼を言つて、セレーノは勢い良く船を飛び出していく。

今は夜の十時前。リストランテなどの店の照明や街灯が照らす中、夜の街を観光客なんかがゆったりと歩いている。そんな人々の間を突風にでもなつたかのように、セレーノは石造りの通りを駆け抜けて行つた。

船着き場からさほど離れていないとはいえ、チエレスティアーレ大聖堂の前に着いた頃にはもう息が切れ切れで、額にはうっすら汗をかいていた。

「はあ……。こんなに、走つたのは、久しぶりだ。さすがに絵描きには、辛いな……」

もともと身体を動かすのが苦手な男である。また絵描きという職業柄、そうそう走ることもない。

足の力が抜けて立っていらなくなり、セレーノは大聖堂の扉の前に座り込んで、空を見上げながら弾む息を整える。今日は綺麗な満月だ。

輝く満月を見ていると、重厚な大聖堂の扉が開き、中からティコが姿を現した。

「あなたは……。こんな時間にそんな所に座り込んで、何をなさつてるんですか？」

扉を開けた真ん前でゼエゼエ息を切らした予想外の男がいる。ま

さかこんな時間に会うとは思わないので、不思議に思っ
てティコは声をかけた。

「やあ、ティコ。今日は月が綺麗だね」

「……はい？」

何を言っているんですか、という顔のティコに、セレーノは慌てて訂正する。

「ああ、違う違う。俺の馬鹿。君に謝りに来たんだ」

「謝りに、て……、そのためにこんな時間にここまで来たんですか？」

そうだ、と頷くセレーノ。それを見てティコはあきれて言った。

「それはわざわざご苦労様です」

「いや、いいんだ。それより俺の話を聞いてくれ」

ふう、と一息を吐いて、セレーノはまっすぐティコを見る。

「この前は本当にすまなかった。君が大切な話をしてくれたのに、俺は真面目に話を聞かなかった。それに、君にとって不快なことも言ってしまった。でも悪気があったわけじゃないんだ。お願いだ、どうか許してくれないか？」

必死に謝るセレーノに、ティコは変わらないポーカークフェイスでぼつりと尋ねた。

「本当にそんなことを言うただけに、ここまでやって来たんですか。……どうしてです？」

「どうして、て……」

額の汗を拭いながら、逆にセレーノは何故そんなことを訊くのかとばかりにティコに言った。

「そんなことじゃないだろう？ 君にとって大切なことだと思ったからだよ。それに誰かを傷つけておきながら平気で暮らしていけるほど、俺は大きな男じゃないんでね」

そうにつこり笑いながら言うセレーノを見て、ティコは胸がきゅっと掴まれたような、経験したことのない不思議な気持ちになった。

「……大丈夫です。別に気にしてなんていませんから。それに、思えばコルディアアーレさんはまだこの街に来たばかりなわけですし、そんな人がいきなりあんな話を聞かされても、何を言っても良いかわからないのが当たり前ですよ」

「いや、それは違うよ」

セレーノはティコの言葉に強く首を振る。

「女神像がなくなるのはやっぱり寂しいよ。俺も初めてこの街を訪れた時に一度、あの大聖堂の女神像を見たことがある。優しい眼差しでこつちを見ていたよ。それを見たとき、何も言葉が浮かばなかった。ただただ女神様に優しく抱きしめられているような、そんな気がしたんだ。不思議と心が満たされたよ。本当にあの女神像は美しかった」

セレーノは真剣な眼差しでティコに言う。

「きつとそれは、この街を訪れたすべての人が感じたことだと思う

んだ。女神像はこの街の人たちだけの物じゃない。だからやっぱり壊しちゃいけないんだよ」

その言葉を聞いたティコは素直に感動していた。

「ありがとうございます、コルディアーレさん。そう言ってもらえると嬉しいです」

「いや、礼を言われるほどじゃないよ。俺は思ったこと言っているだけさ」

照れたように笑うセレーノ。だが、ふと眉間に小さく皺を寄せた。

「もし俺のことを許してくれるのなら、コルディアーレさんじゃなくて、セレーノって呼んでくれないか？」

「……セレーノさん、ですか？」

少し顔を上げてほのかに頬を染めながら、そのポーカーフェイスを崩してティコは恥ずかしそうに微笑んだ。

それを見たセレーノはやっぱり、と嬉しそうに笑った。

「俺の目は間違いじゃなかった。君は笑ったほうが可愛いよ」

その言葉に驚いたティコは、目を大きくして固まってしまった。

けれどすぐにいつもの無表情に戻すと、これまたいつもの抑揚のない淡々とした口調で言った。

「冗談はよしてください。もう遅いのでわたしはこれで失礼します」
「あ、待ってくれよ。お詫びに何かさせてくれないかい。そうだな、明日の夜は空いているかな？ よかったら美味しい物でもごちそうするよ」

ティコは少しの間どうしようかと考えた。けれど、なんだかんだで悪い人ではなさそうだし、なによりセレーノと食事ができることを嬉しいと感じていた。そんな自分に驚きながらも、

「八時過ぎなら」

と少し躊躇いがちに、小さな声でそう告げた。

「よし、わかった。じゃあ、八時半にここで待ち合わせだ。それまでにどこかいい店を探しておくから、楽しみにしていってくれよ」

セレーノがまかせろ、とばかりに片目をつむってみせると、ティコは黙って頷き軽くお辞儀をして足早に大聖堂を去って行った。

その姿を見送って、セレーノは数十分前とはまったく違う晴れやかな気持ちで家に帰っていった。

ヴェントのおすすめ

翌朝。三日間ろくに寝ていなかったせいか、目を覚ますと時計の針は昼の一時半をさしていた。

「やばい！ こんな時間だっ」

ベッド代わりのソファから飛び起きて、急いで顔を洗い、いつもの絵具のついた白いシャツに着替えて、髪の毛の寝癖も気にせずセレーノは家を飛び出して行った。

予定では今日はティコとのディナーのために、美味しいリストランテを探すはずであった。それなのにもう昼である。

セレーノはそんな自分に腹を立てつつ、とりあえず遅い朝食を食べにグストーゾへ向かった。

もちろん目的は朝食だけではない。ヴェントならばどこか美味しいリストランテを知っているかもしれないと思ったからだ。

「リエツラ、ヴェント！」

メニューを注文して、セレーノはさっそく昨夜のことをヴェントに話した。

「なんだ、セレーノ！ あの鉄のポスティーノをデートに誘ったのかよ？」

「デートじゃないさ。ただのお詫びの食事だよ。それでヴェント、どこか美味しいリストランテを知らないかい？」

「もちろん、美味しい飯屋ならたくさん知っているさ。まあ、この店もその一つなんだが……」

そう言いながらも、ヴェントはまだ信じられないといった顔でセレーノを見ている。

「おいおい、セレーノ。マジでティコに惚れてるんじゃないのか？
どうするんだよ、恋人は」

「違うって言うてるだろ。ティコは友達なんだ」

「友達、ねえ。もしそうなら、お前はあいつの初めての友達ってことになるんだろうな」

ヴェントは腕を組んで、じつとセレーノの顔を見た。

「なんだよ、それ？」

「あの性格だぜ？ 人付き合いが良いとはお世辞にも言えねえだろ
第一、あいつが女友達と楽しく買い物とかしている所なんて、見た
ことねえよ」

「それは、ヴェントが知らないだけだろう」

「いや、とヴェントは首を振り、人差し指をビシッと立てて力強く
言った。

「ぜったい、いねえよ」

あまりにも断定的に言うものだから、セレーノはティコのことが
気の毒に思い、話題を変えた。

「話しがずれたよ。本題に戻そう」

ああ、そうだったな、とヴェントは再び腕を組んで考えた。

「俺が知っている限りでは、一つ、二つ……三つだな。この街には

たくさん美味しい飯屋があるけど、俺が気に入っているのはまずはペ
エシエ・スパダっていう海鮮料理屋だ。次にティーモっていう飯
屋。ここは店の裏で野菜を育てて、それを料理に使ってる。この二
つはチェントロにあるぜ。あとは……あ！」

いきなりヴェントは大きな声をだし、ひらめいたとばかりに手の
平をポンと打った。

「いかにいかに、忘れてたぜ。チェントロに一番おすすめの店があ
るんだ。知りたいか？」

ニヤリと楽しいイタズラでも思いついた子供みたいな顔のヴェン
ト。

もったいつけて教えてくれない彼に、セレーノはため息を吐きな
がらも手を合わせて懇願した。

「どうか教えてください、ヴェント様！」

そんな姿に満足したのか、ヴェントはまだニヤニヤしながらも、
セレーノに一押しのお店を教えてやった。

「そこまで言うなら仕方がねえ。少し見つけにくい店なんだが、名
前をヴェネルディって言うんだ。料理ももちろんだが、店がアルモ
川沿いにあって、窓から街頭で照らされた夜の川なんかが見えるも
んだから、なかなか良い雰囲気だぜ。俺も女と行ったことがあるが、
ロマンチックな光景に彼女もぼうつとしてたっけな」

その時のことでも思い出しているのか、ヴェントは遠くを懐かし
そうに見つめている。

この厳ついヴェントがそんなおしゃれ場所で食事をしたなんて…

…。

セレーノは思わず吹き出しそうになったが、そこは必死でぐつとこらえた。けれど、それを敏感に察したヴェントはむっとした顔で、おい、とセレーノを睨んだ。

「ごめんごめん。ヴェントも意外とおしやれさんなんだね。ああ、怒らないでくれよ。俺が悪かった。それで？　そこはけっこう人気の高い店なんだろう。今から予約しても間に合うかな？」

「それは、大丈夫だと思うぜ。なんたってティコが一緒なんだ……いや、深い意味はないぞ。とにかく予約なんて気にしなくて平気さ。ヴェネルディならあのポスティーノだってぜったい満足するぜ。ほら、いま地図書いてやるから、これから下見にでも行ってこいよ。お前がリードして連れて行かなきゃならねえんだ。迷子になったら困るだろう？」

それからセレーノはいつものようにポストに手紙を投函し、チェントロにあるというヴェントー押しのお店、ヴェネルディへと向かって行った。

地図はチェントロの船着き場から書かれており、チェレスティアーレ大聖堂の前を通って北へ矢印がのびている。

進むにつれて賑やかなチェントロの中心街から離れていき、途ややや細い路地や住宅街なんかを通ったりもした。

（本当にこんな所にあるのか？）

ヴェントにからかわれたのではないかと少し心配になってきた頃、近くで水の流れる音がした。

「もしかしてアルモ川か」

からかわれていたわけではなかった、と安心するとともに、地図に書かれたとおり目の前の角を右に曲がると、そこにはヴェネルデイと書かれた品の良い店が姿を現した。

ブロックを積んだような石造りの外壁。アーチを描くように木材でできた扉からは、日が傾いてきたためか、灯された店内の明かりがガラス窓から漏れていた。

「すてきな店だな……」

セレーノは思わず見とれてしまい、店の前にも関わらず、しばらく入り口の真ん前でぼうつとそれらを眺めていた。

するとカランという乾いた音とともに扉が開き、中から黒のスーツに蝶ネクタイをした、これまた品の良さそうな若い男が姿を現した。

「おや？ リエツラ、お客様。いかがなさいました。もしやご予約のお客様でございますか？」

現実に取り戻されたセレーノは慌てて男に言う。

「いや。予約はしてないんだ。ただ、知り合いにこの店はとても料理が美味しいと聞いてね。夜にでも友人と二で来てみようと思ったんだ」

そこでふとセレーノは考えた。ヴェントの言う通り、とても雰囲気の良い良さそうな店だ。ヴェントは大丈夫だと言っていたが、こんな人気の高そうな店が予約無しで利用できるはずがないのではないのか。

そう思いセレーノは目の前の男、たぶんカメラマンだろう、に今夜の店の予約状況を尋ねてみることにした。

「今夜はもう予約でいっぱいかな？」

「ええと……、少々おまちください」

そう言つて胸のポケットから小さな黒革のノートを取り出し予約の状況を確認すると、若いカメラエーレは笑顔でセレーノに言った。

「いえ。お席の方はまだ若干空きがあるようです。ご予約なさいますか？」

やった、とセレーノは心の中でガッツポーズをした。

せっかく空きがあるんだ。これで予約せずに来て、席が埋まってしまうした、などと言われたら格好がつかない。セレーノは一つ頷き、予約するよ、と言った。

「ありがとうございます。それではお客様のお名前をお訊きしてもよろしいですか？」

「セレーノ・コルディアーレだ。あと、友人が一人。八時半過ぎには来るよ」

「コルディアーレ様とご友人様のお二人ですね。かしこまりました。それでは、心よりお待ちしております」

セレーノは丁寧に頭を下げるカメラエーレに軽く手を振って、今夜の準備のためにウキウキと来た道を引き返して行った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4868y/>

ポスティーノ

2011年11月20日02時14分発行